

名古屋市厚生院名誉院長 山本俊幸先生を偲んで

公益社団法人日本化学療法学会の名誉会員であられました山本俊幸先生が、さる2018年（平成30年）5月17日に逝去されました。享年88歳、2年前に先生自ら介護、医療を施されてみえた最愛の奥様を、そしてつい半年前にご子息で本学会評議員を務められ感染症・化学療法学の分野で活躍された山本俊信先生をお見送りされた後のことでした。

山本俊幸先生は名古屋市立大学医学部をご卒業になられた後、同大学の第一内科に入局され、故岸川基明教授の下で助手、講師から医局長を、故武内俊彦教授の下で助教授を歴任されて医局の発展に尽力されるとともに、化学療法・感染症グループを率いて学会・研究活動にも精力的に取り組まれました。故岸川教授が会長を務められた本学会の第19回西日本支部総会〔1971年（昭和46年）〕の際には、事務局の屋台骨として盛会に導かれました。

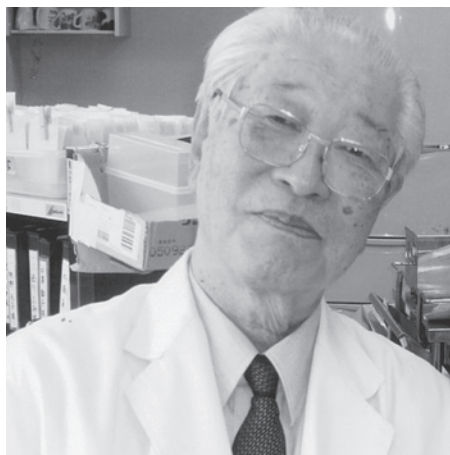
大学から名古屋市厚生院に異動された後には、同院附属病院長、厚生院長として名古屋市の高齢者医療の充実に力を尽くされました。かつて長寿アジア・日本一になられ新聞各紙やテレビで報道された猪飼たねさんと握手を交わしている先生のお姿が今でも記憶に残っています。また高齢者医療の分野で名古屋市厚生院からあまたの研究者を育成され、わが国における高齢者感染症の研究をリードされました。先生は本学会の第34回西日本支部総会〔1986年（昭和61年）〕をはじめ、日本胸部疾患学会（現、日本呼吸器学会）の第47回東海地方会〔1985年（昭和60年）〕、日本感染症学会の第33回中日本地方会〔1990年（平成2年）〕などの会長を歴任されました。

私どもの世代は先生の孫弟子にあたり、入局した時点で先生はすでに大学から異動されてみえたため、臨床現場で直接ご指導いただく機会には恵まれませんでしたが。しかし毎年元旦のお昼に開催される医局の新年会に供するおでんの味付けを他の医局員には任せられず、年末の仕込みに必ずお顔を出され御自ら味を調整されながら若い医局員たちと交流を持たれた姿が思い出されます。学術集会の際には、夜の宴会の場で学問的な話題や診療報酬審査員としての注文を頂いたりする一方、グルメとして料理やお酒のうんちくなどで未明まで話が尽きることがありませんでした。さんざん飲み明かされた翌朝も朝一番から学会場の前方の席に、学生時代に水泳で鍛えられた長身の身体で背筋を伸ばし座されている姿を見ておおいに感服したものでした。一線の間から引退された後も、人と人との交流を大切にされ、おかげで先生を囲む場を通じてたくさんの方々との出会いが生まれました。品格と勤勉、ユーモアと優しさを併せ持つ巨大な存在であったと改めて思います。心からご冥福をお祈り申し上げます。

名古屋市立大学大学院医学研究科 呼吸器・免疫アレルギー内科学 中村 敦

先生のご略歴

- 1957年（昭和32年） 名古屋市立大学医学部卒業，同第一内科に入局。
以後，助手，講師，医局長，助教授を務める。
- 1979年（昭和54年） 名古屋市厚生院に着任，副院長・第一診療科部長を務める。
- 1982年（昭和57年） 名古屋市厚生院附属病院長・第一診療科部長・リハビリテーション科部長を務める。
- 1987年（昭和62年） 名古屋市厚生院長に昇任する。
- 1996年（平成8年） 名古屋市厚生院を退職，同名誉院長となる。
以後，愛知県国民保険団体連合会，および医療法人開生会
老人保健施設ラベンダーに勤務する。



故 山本俊幸先生